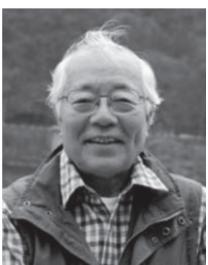


富士山のトリック——下山する文明——

日本水フォーラム代表理事
竹村公太郎

Koizumi Takemura



圧倒する富士山

新幹線で名古屋に向かった。箱根のトンネルを過ぎると「右手に富士山が見えます」という車内アナウンスが流れてきた。美しい富士山がそびえていた。やはり圧倒的だった。

しかし、この富士山の姿は、日本人にとってトリックだった。日本人はこの富士山の姿に影響されていた。影響され過ぎていた。

一度だけ富士登山をしたことがある。富士登山は岩だらけの斜面を登っていく。見えるのは目の前の岩だけだ。休んで水を飲みながら上を見ても、見えるのは手の届かない坂の上の雲。再び立ち上がり、歩き出す。岩につまずき、

斜面に足を取られながら登っていく。登山では自分しか頼れない。山では誰も助けてくれない。歯をくいしばってやっと頂上の山小屋に着く。雑魚寝で寝苦しい夜を過ごす。早朝の三時頃に起きて、暗い中を頂上に向かう。

頂上にたどり着く。その頃に太陽が登ってくる。眩しい朝日に圧倒される。御来光に手を合わせる。寒さが身を刺すが、その寒さも禊まじのように感じられる。このゴールの儀式が終われば、富士登山は終了する。

富士登山の目的は頂上であり、そのあとに目的はない。あとはただ下山していくだけだ。富士登山と人生と日本社会

富士登山と人生と日本社会

この富士登山は、人生とだぶっていく。学校を出て薄給の社会人として歩みだす。結婚して、家庭を構え、子供を育てていく。子供が大きくなり、元氣だった両親も体力が急激に弱っていく。社会的な責任も少し付き、石につまずかないよう、足元を確認して歩み続ける。一休みしていても心は休まない。再び歩み出し、地位が付いたころに定年を迎える。子供も成人し、家庭の重荷はない。責任の軽い第二の人生の坂を降りていく。

懸命に坂を登り、頂上にたどり着き、降りていく。富士登山と人生のイメージは完全にだぶっていく。富士山を愛してきた日本人が、自分の人生と富士登山をだぶらせるのは当然であった。

ところが、この富士登山とだぶるのは、個人の人生だけではなかった。日本社会そのものが富士登山のイメージとだぶっていく。

江戸末期に三、〇〇〇万人強だった日本の人口は、明治になって一気に爆発した。そして、二〇〇四年の二二、〇〇〇万台をピークにして急速に下がっていく。約一〇〇年後には、六、七、〇〇〇万人になると予想されている。

この明治から二十世紀初頭の時代が近代であった。この近代は膨張の時代であった。明治大正そして昭和生まれの人々は、この膨張の近代を駆け上っていった。

この時代はあらゆるモノが不足していた。電気が足りない。住宅が足りない。水道を下水道が足りない。水害に苦しみ、交通渋滞に悩まされた。社会が急激に膨張する悩みであった。人々はこの膨張圧力に懸命に対応した。効率を高め、生産性を上げることに集中した。生産性を高めるため、モノは画一化された。人々は都市に集中した。大量にエネルギーを使ってスピードを上げた。

日本社会は生産性を上げ、見事に世界最先端の経済大国になった。

富士山のトリック

二十世紀初頭、人口は頂点に達し、GDP

も成長を止めた。文明の頂点にたどり着いた。

この頂点では、モノは溢れ、欲望をそそるモノはない。この頂点では見晴らしが良く、過去を振り返ると、過去が良く見通せた。過去だけではない。未来まで見通せた。日本社会の人口減少が見えた。産業経済の縮小が見えた。

この日本社会の変遷が富士登山のイメージとだぶっていく。日本社会は頂点に達し、あとは縮小していく。日本人は富士山のイメージを、個人の人生だけではなく日本社会にもだぶらせてしまった。しかし、これは誤りだった。私たち日本人は富士山のトリックにかかっていた。

ピーター・フランクル氏の言葉が迫ってくる。氏は著名な数学者であり、日本で生活しているユダヤ系フランス人で、上手に日本語を話す。

フランクル氏は、ユダヤ人を山登りに譬えた。それは「ユダヤの民は山の地点にたどり着くと、次の山へ向かっていく。そのために、登った山を降りていく。登ったら、降りる。頂点が目的ではない。次の山を登るのが目的だ。だから山から降りる」という言葉である。

初めてフランクル氏の話聞いた時、心が震えてしまった。富士山のトリックに気が付いたのだ。

個人の人生は終わる。しかし、文明は終わらない。文明の前には次々と険しい山々が立ちふ

さがってくる。

文明の歩みとは、連なる山々を進むこと。だから、一つの山に登頂すれば、次の山に登るために、降りていく。次の山を登らず、山の前で立ちすくむことは、文明の衰退と滅亡を意味する。山々を次々と登っていくしかない。それが文明存続の宿命なのだ。

やるべきこと

未来の日本文明の前には、厳しい山々が次々と立ちふさがってくる。それらは地球規模の険しい山々だ。

化石エネルギーの逼迫。食料・水資源の逼迫。大気・水環境の悪化。巨大地震の発生。最も険しい山は、気候変動に伴う気象の狂暴化と、数百年間継続していく海面上昇である。

日本は、これらの厳しい課題を一つずつ克服していかなければならない。そして次の山に登っていかねばならない。

頂上に立ち「登山は終わった」などと言ってられない。そのためには躊躇せず、今、立っている頂点から降りていく。次に待ち構えている山を登るために、降りていく必要がある。

日本の人口減少を恐れる必要はない。人口減少、つまり、山を降りることは、日本が次の険しい山を登るために必要な準備となる。